

## 参考図書紹介

### 花生態学図鑑

田中肇（田中肇・平野隆久写真）. 2000. 花の顔—実を結ぶための知恵—. Point 図鑑. 山と溪谷社. 191 pp. ISBN4-635-06304-6 C0645 定価（本体）1900 円.

著者である田中肇氏は、永年の研究が評価されて、昨年は花粉学会賞、本年は財団法人吉川英治国民文化振興会から第34回吉川英治文化賞を受賞されている。実をならすために昆虫を引き寄せる植物の花と、一方でそこに報酬を得ながら送粉を手伝う昆虫の相互関係を扱う学問としての花生態学は、植物と動物というふたつの生物分野にまたがる学問分野で、切っても切れない関係のはずが、研究の縦割りの弊害で、特に日本では最近まで扱う研究者の少ない分野であった。田中氏が花生態学の探究を始めたこと自体が、重要な功績であろう。

本書には、「実を結ぶための知恵」という副題が設けられている。植物の「知恵」は聞き慣れない言葉であるが、実は本書を含む、Point 図鑑シリーズはこの点に着目しているようである。花や葉の形、つき方（「花の声」）、つるの伸び方（「フェンスの植物」）、匂い（「香りの植物」）、そうしたすべてのことひとつひとつが植物がうまく生きる上での「知恵」だという扱いである。山と溪谷社は様々な図鑑を出している、植物図鑑ではレベルや情報量ごとにシリーズがあるが、このシリーズは実にユニークな構成になっている。

その中の一冊である本書では、「知恵」の具現



として、美しさの陰に隠れて見落とされがちな、花の形（構造）に注目する。図鑑としての印刷の良さ（発色の良さ）も際だが、何より細部まで鮮明な写真がふんだんに使われていることに満足がいく。この写真群は著者の意図を明確に伝えている。ただ美しいだけの写真ではないし、昆虫が訪花している情景を撮影しただけのものでもない。必要な花は断面拡大写真を加えて、蜜腺、雄ずい、雌ずいの位置関係を明らかにする。見ていると、花の中で、蜜をもらう代わりに花粉を媒介する昆虫の動きが容易に想像できる。それだけでも説得力があるし、わかりやすい。説明も簡潔な文章で読みやすい。

最近では、植物の体構造に関する遺伝子群もいくつか明らかにされ、花の形（特に花卉構成）については数種の遺伝子の組み合わせで説明できるようにもなっている。花としていくつかの類型は確かにあるが、これほど多様な工夫があるというのには驚かされる。こうした工夫のひとつひとつがその植物の生きるための必要であることは紛れもない事実である。なるほど、美しいだけでは「実」はならない。実をならせるためには「知恵」が必要なんだと思わされる。掲載されている141種の花の「知恵」を見て、うわべにとらわれ、本質を見落としがちな日々を反省するのもいいかも知れないが、とりあえず巻頭言にあるように本書と虫メガネを持って、自分の目で確かめにいこう。

ところで、随所に訪花昆虫の写真がある割には、われらがミツバチは登場機会が少なく、ハナバチではマルハナバチが幅を利かせている。それでも重要な蜜源植物であるレンゲソウを見てみよう。ここにはさすがにセイヨウミツバチが写っている。本文には「…こうして蜜が吸えるのは、頭がよくて力の強いハナバチだけである」とある。愛しいミツバチはやはり頭がいいと、花の側からお墨付きをもらっていて、やっと安心できる。（中村 純）